冷戦終焉20年

何が、どのようにして終わったのか

塩川伸明
SHIOKAWA Nobuaki

What Did the 'End of the Cold War' Mean?: Rethinking on the 20th Anniversary

keiso shobo

はしがき

今から約二〇年前の一九八九－九一年は、現代史の大きな転機だった。その少し前にゴルバチョフ政権下で始まったソ連のペレストロイカ（建て直し＝改革）がこの時期に一つのピークに達し、一九八九年秋には東欧諸国の激動が起き、「ベルリンの壁」が開放され、年末のマルタ会談――ブッシュ（父）とゴルバチョフが共同で冷戦終焉を宣言――へと続いた。翌九〇年一〇月にはドイツ統一が実現し、九一年には八月のソ連クーデタ事件を経て、年末のソ連解体へと至った。つまり、この時期に《ソ連・東欧の社会主義体制》・《冷戦》・《ソ連という巨大な多民族国家》のどれもが、その存在を終えたのである。

こうして一つの時代に幕が下ろされたわけだが、それから二〇年を経た今、それらに代わって登場すると期待された《繁栄した市場経済》・《世界的な平和》・《民主的な独立国家》は、どれも希望通りの形では実現していない。地球の各所で旧来の国家間戦争と異なる形での武力紛争――「新しい戦

争」と称される(1)――が頻発しているし、終わったはずの冷戦についても、時おり「新しい冷戦」の開始がささやかれたりしている。「民主化の波」といわれた現象の後には、多くの国で権威主義的政治への傾斜が観察されており、「市民社会」の再発見と称された動きの多くはしばしば忘却の彼方となっている。そしてまた、市場経済の万能が賛美された時期がしばらく続いた後にやってきたのは、貧困や格差の拡大をはじめとする種々の社会問題の噴出であり、二〇〇八年後半に世界規模での大不況が到来するに及んで、日本を含む各国で「市場万能論」批判が一挙に高まり、一部では、忘れられていた社会主義を見直そうとする機運さえもある（時ならぬ小林多喜二ブームやゲバラ・ブームなど）。

これはいったい何を意味するのだろうか。二〇年前に「古い時代の終わり」とともに始まった新しい過程（「改革」）が挫折して、古いものへの逆戻りが起きているのだろうか。あるいは、そもそも二〇年前の時点での希望に誤りがあったのだろうか。二〇年前に「終わった」と考えられたものは、本当に終わったのか、それとも実は終わりきっていなかったのか、いずれにしてもその終わり方はどのようなものだったのか等々、多くの疑問がわく。

本書は、一九八九－九一年の世界史的激動から二〇年という地点に立って、①あのときに終わったものは何だったのか、②それはどのようにして終わったのか、そして③その後に進んでいる変化はどのようなものなのか、を考えることを課題とする。これらの問いのうち、第一問と第二問は往々にして自明視されており、そもそも振り返る必要もないというのが、大方の感覚のようである。一例を挙

げるなら、現代における民主主義のおかれた状況について鋭い問題提起を行なった好著に、「〔冷戦終焉・ソ連解体によって〕消滅したものが明らかなのに対して、何がかわりに登場したかは、議論の分かれるところである」という個所があるが(2)、ここには、そうした感覚が典型的に表出されている。

しかし、「何がかわりに登場したか」が見定めがたく、冷戦後二〇年の変化が期待通りのものでなかったことの一つの理由は、「何が終わったのか」「どのようにして終わったか」が十分深く理解されておらず、皮相で安直な理解にとどまっていたことにあるのではないだろうか。とするなら、右の第三問について考える前提として、第一問・第二問についても改めて振り返ってみる必要があるのではないだろうか。本書はこのような課題に応えようとするものである。

はしがき

Ⅰ　問題の所在……1

Ⅱ　何が終わったのか……13

1　はじめに――「現存した社会主義」を見る眼　13

2　目指されたものとその帰結　17

3　幻滅の要因をどう理解するか　27

4　矛盾をかかえながらの存続　46

5　「社会主義改革」論の歴史　63

Ⅲ どのようにして終わったのか……77
1 巨視的な必然性と具体的過程の偶発性——長期・中期・短期の視点 78
2 ペレストロイカ——体制内改革の試みから体制転換へ 86
3 《冷戦終焉》再考——冷戦の二通りの終わり方 107
4 軟着陸の試みから崩落へ 125

Ⅳ 「その後」——どのような変化が進行しているのか……143
1 さまざまな種類の「自由主義（リベラリズム）」 143
2 市場経済化の期待と現実——「現存した社会主義」から「現存する資本主義」へ 156
3 リベラル・デモクラシーの制度的導入とその権威主義的運用 177
4 冷戦終焉後の世界秩序再編成 193

V　結びに代えて……217

注
あとがき
索引

コラム
① 社会主義・共産主義・「現存する／現存した社会主義」
② 社会主義圏における大衆反乱
③ 一九五六年スターリン批判の影響
④ 一九六八年のチェコスロヴァキアとハンガリー
⑤ NATOの東方拡大――一九九〇年とその後
⑥ ゴルバチョフ支持率の変化
⑦ ソ連政権vsロシア政権
⑧ さまざまな三元論の系譜
⑨ 「オリガルヒ」と「担保入札」方式
⑩ 現代ロシアの政党制
⑪ 「カラー革命」をめぐる論争
⑫ 「新冷戦」／「新しい冷戦」

あとがき

本書は一風変わった現代世界論の試みである。通常、現代世界論とか国際政治・国際関係というと、アメリカをはじめとする欧米先進諸国か、あるいは激しい紛争で世界中の注目を集めている特定の事例などを主要トピックに据え、それに日本の動向などをからめる形で論じられることが多い。それに対して、本書はロシア・旧ソ連諸国をはじめとする旧社会主義圏の動向を主要トピックに据え、それを通して現代世界の構造およびその変化について考えようとしている。このような問題設定に対しては、そもそも社会主義とはもう終わったものであり、そんなものを取り上げることにどういう現代的意義があるのかという疑問が、先ず寄せられるだろう。また、そうした論点が重要な意味をもつのはロシアその他の諸国だけなのだから、そういうテーマを論じるのは特定地域に関する地域研究にすぎず、それを「現代世界論」などというのはおこがましいという反応も予想される。

いや、そうではないのだ、これもまた現代世界の構造およびその大きな変化の一つの構成要素であ

り、しかもあまりきちんと解明されていないために、全体構造理解にとって必須の「ミッシング・リンク」となっているのだ、というのが本書の主張である。冷戦期においては、社会主義というものは――その理解・解釈・評価は多様だったが――ソ連・東欧圏・中国などの問題であるだけでなく、欧米諸国や日本その他の国々に対しても、またいわゆる発展途上諸国に対しても、陰に陽に種々のインパクトを与え、無視できない位置を占めていた。それが今日ではほぼ無視できるほどに後退したという事実は、欧米諸国・日本・発展途上国などにおける最近の変動を考える上でも、一つの無視できない構成要素である。たとえば、冷戦終焉後かなりの期間、国際政治で大きな位置を占めたアメリカの単独行動主義とか、経済面における市場原理主義の強まりといった現象も、対抗者としての社会主義の退場という事実を抜きにしては理解することができない。

誤解を避けるために強調しておくが、この指摘は、社会主義をどのように価値的に評価するか――それを擁護したり、再興を目指したりするかどうか――ということとは別個の次元のものである。今日の価値意識からどのように評価するかという問題とは別に、歴史的な事実として無視できない重みをもったこと、そしてその後におけるその重みの急速な低落という事実もまた、この間の世界全体の構造転換の大きな要素をなしているということ――これが本書で確認したいことである。多くの場合、その退場は単純に自明視され、その意味について熟考する作業もほとんどなされていないが、それでは、「社会主義」を一つの構成要素としていた現代世界の構造およびその大変動の認識も、バランス

を欠いたものになってしまう。

手近な一例として、最近まで続いていた日本の「一九五五年体制」を振り返ってみるなら、自民党とともにそれを担ったもう一つの主柱は日本社会党だった。その社会党はこの間、急激に分解し、直接的な後継党たる社民党が極小勢力になる一方、一部が流入した民主党は今や大きな政権党となっている。ということは、この間の政界再編のなかで最大の変動を体現したのは――自民党は下野したとはいえ自民党のままであり、共産党も共産党のまま、公明党も公明党のままであることを思うなら――社会党だったということになる。知識人の世界においても――これは日本に限らず、欧米諸国の多くにも共通する――ある時期まで大きかったマルクス主義の影響力が急激に低下し、ほとんど嘲弄の対象でしかなくなっているという変化があるが、これもまた、ここ数十年の世界の構造的変化の重要な構成要素である。繰り返すが、そのことの善し悪しを論じようというのではない。問題なのは、よかれ悪しかれ大きな位置を占めてきたものが急激に退場するということは、価値評価に関わりなく大事件であり、検討と考察に値する事柄であるにもかかわらず、そのことが意識されていないという点にある。

本書は直接に日本・欧米諸国・発展途上諸国のことを主要テーマとしているわけではないが、社会主義およびその退場を論じることは、上記のような意味で、世界全体の構造変化の「ミッシング・リンク」を埋める意義があるのではないかという観点に立って、一風変わった現代世界論を提示しよう

としたものである。従って、特定の国（たとえばロシア）や特定の論点に専門的な関心をいだく読者だけでなく、より広く、およそ現代世界について何らかの関心をいだく方々全般を想定読者として書かれた。この試みがどこまで成功しているかは分からないが、あまり厚くない本であるし、文章もできる限り分かりやすく書くよう努めたので、さまざまな観点から現代世界について考える人々に幅広く読んでいただけるなら大変幸いである。

*

冷戦終焉をはさむここ数十年のあいだに、「社会主義」「マルクス主義」「左翼」等の語のイメージは、日本国内でも大きく変わった。特に一九九〇年代から二一世紀初頭にかけては、それらの人気が大きく低落し、「ソ連」に至っては「いうもおろか」という風潮が一般的となった。インターネットを熱心に使う若い世代の間では、「ネット右翼」が増大しているらしいし、そこまでいかないまでも、「サヨク」をひたすら軽蔑用語として使う心性は相当広い範囲に行き渡っているようである。

そうはいっても、世間一般はともかく知識人のあいだでは、現状に対して批判的な姿勢をとろうとする発想は、まだ無視できない広がりをもっている。かつて使われていたのとは異なった最広義の意味で「左翼」という言葉を使うなら、そうした最広義の「左翼」的発想は死に絶えたわけではない。それどころか、一九九〇年代を通じた低落が極点に達した後、二一世紀に入って数年経ったあたりか

ら、一部で「左翼」復活傾向も見られる。しかし、このことを指摘するのは、「ああ良かった」というような安易な安心をしたいためではない。

今日、種々の社会問題に批判的な立場から取り組もうとする人たちは、人気の急落した言葉と自分が結びつけられるのを避けるために、いわば「隠れマルクス派」「隠れ社会主義者」「隠れ左翼」といった態度をとることが多い。そのこと自体は理解できないことではない。だが、問題は、そのような「隠れ」の態度をとることで、過去との関係――総括、克服、死と再生等々――がぼやかされがちになる点にある。かつて一九六〇年代から七〇年代にかけて、それまでの正統左翼を批判する運動として「新左翼」と総称される多様な潮流が各国で登場し、注目を集めたことがあった。この「新左翼」は今となってはそれ自体が「古い」ないし「昔懐かしい」存在と化しているが、それに代わるようにして、「現代版・新生左翼」ともいうべき潮流が登場しつつあるように見える。そうした「現代版・新生左翼」は、もちろん、かつての新旧左翼の単なる繰り返しではなく、その限界を乗り越えた新しい潮流という自己意識を持っているはずである。だが、その多くは「社会主義者」と公然と名乗らないことによって、「お前は社会主義の破産をどう考えるのか」という問いを突きつけられずに済み、その問題から目を背けてしまっているのではないだろうか。

「現存した社会主義」について掘り下げて考えることなく、「いうまでもなく馬鹿げた失敗例」とあっさり片づけるのが今日の大勢だが、そのように安易に考えていると、その「いうまでもなく馬鹿げ

た失敗例」とは一線を画したはずの新しい潮流が意外に同種の問題をかかえるかもしれないという問題意識が欠如することになる。その点、ベネディクト・アンダーソンが紹介している次の言葉は味わい深いものがある。

「ポスト共産主義の現代世界に暮らす……読者にとって……いまは亡きマルクス主義―共産主義の教義を……論じる著作など、無用なもののように思われるにちがいない。……なんといっても、この一〇年でマルクス主義―共産主義の理論、実践、組織は……すでに破綻を来たし、完全に崩壊してしまったのだ。それなのに、どうしてわざわざ、この政治的死体について長々と退屈きわまる死亡記事を書くのはいうにおよばず、読んだりするというのか。それに対する私の回答は、つぎのようなものだ。共産主義の亡霊は、死んではいるものの、いまだに私たちにとりついている。生ける者と長く波乱に満ちた契約を交わしてきたため、死者はその親密な対話者の文化的精神のうえに深い刻印をのこさずに旅立つことはなかった。そうであるからこそ、共産主義の幽霊譚を書き、読み、理解することを通じてのみ、生ける者は、みずからの下意識にある文化的自我を完全に意識することができるようになるのである。」(Kasian Tejapira, "Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958," Ph. D. Thesis, Cornell University, 1992; ベネディクト・アンダーソン『比較の亡霊――ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社、二〇

〇五年、四七二頁より重引)。

*

本書は書き下ろしの著作だが、部分的に、いくつかの旧稿を換骨奪胎しつつ取り込んだところがある(その大半は大幅な改稿を施しており、旧稿再録というよりも実質的新稿としての性格が濃いが)。それらの旧稿を一覧にするなら、次の通りである(*を付けた文章は、私のホームページ〔URLについては#1 223頁参照〕に収録してある)。

●「『現存した社会主義――リヴァイアサンの素顔』へのさまざまな論評に接して」(二〇〇一年)*

●「『もう一つの社会』への希求と挫折」『岩波講座・二〇世紀の定義』第二巻(溶けたユートピア)、二〇〇一年所収

●インタビュー「フランス革命からソ連消滅までの二〇〇年」『毎日ムック・シリーズ・二〇世紀の記憶、新たな戦争、民族浄化・宗教・電網、1990-1999』毎日新聞社、二〇〇一年所収

●「歴史的経験としてのソ連」『比較経済体制研究』第九号(二〇〇二年)

●二〇〇二年度日本政治学会大会共通論題Ⅰ「二〇世紀は政治学をどう変えたか」報告「ソ連史（現存した社会主義の歴史）の観点から」（二〇〇二年一〇月五日、愛媛大学）＊

●「三つの自由主義――市場経済（自由経済）・経済自由主義・政治的リベラリズム」『比較経済体制研究』第一〇号（二〇〇三年）

●「冷戦・ソ連・社会主義」『週刊朝日百科・日本の歴史』第一一五号（現代⑤アメリカ――日米交錯の諸相、二〇〇四年八月二二日）所収

●稲葉振一郎・立岩真也『所有と国家のゆくえ』（ＮＨＫブックス、二〇〇六年）をめぐるトークショーの記録（ジュンク堂池袋本店、二〇〇六年九月一六日）＊

●「ロシア革命九〇年を考える」『ユーラシア研究』第三七号（二〇〇七年）

●「旧ソ連地域の民族問題――文脈と視点」『ユーラシア研究』第四〇号（二〇〇九年）

＊

今から一〇年ほど前に、旧著『現存した社会主義――リヴァイアサンの素顔』（勁草書房、一九九九年）を出したとき、このテーマについて書けることは一通り書ききったというのが、その時点での感覚だった。断片的な落ち穂拾いや補足は別として、このテーマについて何かまとまった形で書くこと

は当分ないだろうと思われた。

しかし、さすがにそれから一〇年も経つと、「社会主義」「冷戦終焉」「体制転換」等をめぐる言論状況やそれらへの視線にもいくつかの変化があり、そうした動向を踏まえた新しい議論が必要ではないかと考えるようになってきた。二一世紀初頭に「新しい冷戦」的雰囲気が高まったことは、「冷戦終焉」についてもう一度きちんと考え直す必要を物語るように思われたし、ブッシュの退場とオバマの登場によって「リセット」が言われ出したことは、一つのサイクルがまわりきったことを意味するように思われる（余談だが、世界中の注目を集めているオバマの核廃絶論は、元来、二〇数年前にゴルバチョフが言い出したものである）。「現存した社会主義」退場後の世界を蔽った市場原理主義の勝利という感覚は、ここ数年影をひそめ、この面でも一つのサイクルがまわりきったという観がある。

こうした状況を眺めながら、そろそろ旧著の焼き直しや二番煎じではない形で「現存した社会主義」「冷戦終焉」について新しい視点から語ることが可能になりつつあるのではないか、という感覚をここ数年いだくようになった。そのような思いから本書の執筆に取りかかったが、いざ実際に書き始めてみると、予想外に困難な作業だった。目まぐるしい変化を横目でにらみながら、今から二〇年前のことを思い起こし、「冷戦後」の時代について考えるという作業は、「現代史」という分野の研究が現状の激しい変化に振り回されざるを得ないということを改めて痛感させた（時事問題を主要内容とするわけでないとはいえ、「現状」を念頭におきながら書いた書物であるので、執筆時期を明示するなら、本書の

原稿は基本的に二〇〇九年三―八月の執筆であり、九―一〇月に若干の補訂を施した)。

世間で「常識」視されている見解に逆らう「異説」的主張を多く含むだけに、本書が読者にどのように受けとめられるか、多少の不安がなくもないが、ともかく自分なりに一つの見通しをつけることができ、肩の荷を少しだけ下ろした気がしている。

＊本書の準備に際して、独立行政法人日本学術振興会から二〇〇七―〇九年度に科学研究費基盤研究A「非欧米世界からの比較政治学」(課題番号一九二〇三〇〇七、研究代表者塩川伸明)の交付を受けた。

二〇〇九年一二月三日(マルタ会談における冷戦終焉宣言二〇周年の日に)

著者